
龍姫

神栖忠明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍姫

【Nコード】

N4992A

【作者名】

神栖忠明

【あらすじ】

俺 巽滲児は平凡な高校二年生だ。本当に超がつくほど平凡だ。容姿普通、成績普通、全てが普通。そんな俺はこれから普通で面白みの無い人生を送っていくものだと思っていた。しかし、彼女に出会ってから全てが変わったのだった

第一話：危機を救ったものは…（前書き）

みなさんの小説を読んで私も書いてみたいと思い投稿しました。しかし学生なので語彙も少なく、どこか文がおかしいかもしれません。おまけに更新も遅いと思います。それでも良いという方は読んでみてください。

第一話：危機を救ったものは…

ハアハアハア

「なんなんだあいつは！」

夕暮れの市街地の中、学生服を着た少年が走っている。容姿を一言でいえば平凡、特別美形でもなければ特別醜悪な顔をしているわけでもない。そんな少年 巽漣児は走っていた。まるで何かに追われているかのように。

「とりあえずはまいたかな？」

少し開けた広場に立ち止まり漣児は振り返った。

「助かった…」

緊張が解け、その場にへたりこんでしまった。いくら若いとはいえ全力疾走を続けられれば誰でも疲れてしまうだろう。息を整えるためにしばらく動けなかった。ズン…ズン…ズン…

「うっ…もう来たのか!？」

ズン…ズン…ズン…

足音にあわせてアスファルトの地面が微かに揺れている。かなりの重量があることがわかる。漣児が逃げてきた道にそいつは現れた。身長は3メートルをゆうにこし、肉体は筋骨隆々という言葉通りの体。なにより特徴的なのは額から生える二本の角と、口からのぞく牙。それはまるで…

「この鬼さつきよりでかくなってやがる！」

まさに鬼だった。

「くそっ…」

漣児は再び逃げようと足に力を込めた。

ズカァーン!!

鬼が地面に足を叩き付けた。

「うわっ！」

地面に衝撃が走り大きく震え、漣児は転んでしまった。

「早く逃げないと！」

立ち上がるうとした漣児の体に影がさす。おそろおそろ顔をあげた。鬼が拳を振り上げていた。

（死ぬ…のか）

あまりの恐怖に体が言うことをきかない。しかし、無情にも鬼の拳が振り下ろされる。

「うわあああ！」

「でいつ！」

何かが鬼を吹き飛ばし、漣児の目の前にたっていた。

「へっ？」

漣児はあまりの出来事にまぬけな声をだしてしまった。そこにたっていたのは美少女だったのだ。

第一話：危機を救ったものは…（後書き）

どうでしたでしょうか？悪かった点などをご指摘して頂ければ次の投稿までには直そうと思います。是非感想をお願いしますm（――）

m

第二話：非日常への入り口

ジリリリリ

カチッ

「起きるか…」

多少眠そうにしながらも少年 巽 澪児は目を覚ました。 澪児は市立水治高校^{みずぢ}の二年生。今朝もそのために起きた。

「朝飯でも作ろうかなあ…」

彼が朝食を作るのは水治高校の寮で暮らしているからだ。

澪児は和食派である。毎朝白米と納豆と味噌汁を食べるのが習慣になっっている。

朝食を食べ終え、顔を洗い歯を磨く。そして制服に着替え家をでた。学校へは寮から徒歩五分と比較的近い距離にある。そのせいか教室につくのはいつも時間ぎりぎりになる。

この日もそうだった。

ガラガラ

2 - A の教室の戸を少々乱暴に開け中に駆け込んだ。

「巽…。またぎりぎりか」

入ると同時に日誌で頭を叩かれた。

「遅刻じゃないんだからいいでしょう？ 犬飼先生」

犬飼^{いぬかいたけお}武雄。 澪児の担任で国語科の教師。いつもよれよれのシャツとジャージというだらしない格好をしている。

「むう……。まあいいか。席につけ」

「はい」

透児が席につくと犬飼は出席をとりはじめた。

四時間目の授業が終わり昼休みになった。

「巽。学食行こうぜ」

そう声をかけてきたのは小学校から今までずっと一緒の大親友である長門亮平だ。ながとりやうへいちなみに顔だけは良いので透児よりモテる。

「そつだな」

「まってまって！私も行く！」

慌てた様子で一人の女子生徒が言った。

「お前が弁当持ってこないなんて珍しいなあ。加奈子」

穂村加奈子も小学校からずっと一緒だった。ちなみに加奈子は容姿もなかなかで成績もいい。

加奈子は眠そうに欠伸をして、

「昨日忙しくてあんまり寝てないの。だから今朝は早起き出来なくてお弁当作れなかったのよ」

「昨日何かあったのか？」

透児は少し心配そうに言った。

「別になんでもないわよ？ただの親の手伝い」

「ふん」

それから三人はとりとめのない話をしつつ食堂に向かった。

昼食を食べ終え休憩しているとき亮平が、

「そついや巽は彼女つくらないのか？」

いきなりそんな事を言ってきた。

「わ、私も聞きたいわ！」

加奈子も妙に力がこもった声で言った。

「はあ……。つくるきもないし出来ないと思う。俺は全てが普通だからな……」

自分で言いながら悲しくなってきたのか言葉は段々小さくなっていった。

「そんなことないわよ！そりゃ見た目は普通だし成績も平凡だけど！人は中身よ！中身！」

透児はそれを聞いて更に落ち込んだ。

「加奈子。それはフォローになってないぞ……」

「えっ！？そ、そう？」

「もうこの話はおしまい！昼休みも終わるしな！」
と言って透児は走って行ってしまった。

「逃げやがった……」

亮平は呆れた顔で見送った。

「おい加奈子。やっぱりお前溲児の事が好
」
「うわあああ！だまれ亮平！死ね！」

ドコッ

亮平のみぞおちにボディブローをおみまいし加奈子も逃げていった。

今日最後の授業も終わり下校時間になった。

「加奈子〜。亮平知らないか？昼休みからみかけないんだが……」

「さ、さあ？シラナイワヨ？」

あきらかに態度がおかしかったがつっこむと怒られそうだったのでやめておく。

「そ、それより溲児。今日用事ある？ないなら遊びに行こうよ！」

「う〜ん……。今日はやめとくよ。ちょっとよりたいところがあるから」

「そう……。わかったわ。じゃあまた明日ね！」

加奈子はそう言って教室からでていった。

「マンガ読みたいから帰りたい、なんて言えないよな〜」

溲児はひとり眩き教室をでた。

溲児は学校の近くにある商店街に向かっていた。マンガの新刊を買ったためだ。

（やっぱり加奈子には悪いことしちゃったかな〜……。今度埋め合わせするか〜）

そんな事を考えながら歩いていると、

(ん?)

ある異変に気付いた。

(人がいない?)

今は夕暮れだ。ここは商店街なのでいつもなら夕食の買い物に来る主婦たちであふれる。しかし今は一人も見掛けられない。商店の蛍光灯の光だけが妖しく輝いていた

「ミツケタ……」

不意に声が響いた。

「ドウチヨウシヤ”……。クロス！」

透児の後ろに……鬼がいた。しかも目を爛々と光らせ追い掛けて来る。

「う……うわああ！」

第三話：日常の裏側

(はっ！？あまりに衝撃的で今日の出来事が走馬灯のように……)

「おい大丈夫か？」

そういつて美少女は話しかけてきた。腰まで届く黒い髪、黒く澄んだ瞳、モデルのようなスレンダーな体型。道端ですれちがったら百人中百人が振り替えるだろう。

しかし一つ変な所があった。美少女は巫女服を着ていたのだ。神社ならともかくこんな町中では絶対に見掛けないだろう。

(近くに神社あったかな？)

「おいつ！大丈夫か！？」

「だ、大丈夫です！」

「ならいい」

「グウウウ……」

吹き飛ばされた鬼が立ち上がった。邪魔された事に腹が立ったのか美少女のことを睨みつけている。

しかし美少女は少しも怯むことなく平然と鬼を見ていた。

「お主はさがつておれ」

透児はおとなしく指示に従った。

「鬼ごときが我に逆らおうとはな……。来い雑魚！」

「グオオオ！」

鬼は美少女に向かって真っ直ぐ突進していった。しかし美少女は避けようともせずただ右手を前にかざしただけだった。

鬼がぶつかる瞬間美少女の右手が輝いた。

「去れ。雑魚」

パン！

右手に触れたとたん鬼は吹き飛び、空中で破裂してしまった。

あたりに鬼の肉片が散らばり血の臭いがみちる。それに澪児は顔をしかめた。この惨状を生み出した張本人は特に気にしていないようだった。

「怪我はないか？」

そう言いながら美少女が近付いてきた。

「一応大丈夫です。ずっと走っていて疲れましたが…」

「そうか。我が夫に怪我がなくてよかったですよ…」

「……はあ？」

（今なんて言った！？お、夫って言ったよな。夫って……あれのことだよな……。ふ、夫婦の……いやまて今この人とは出会ったばかりなはずだし……）

「どうした夫よ？や、やつぱりどこか怪我してるのか！？」

心配そうに美少女が顔を近付けてきた。澪児は少し下がり、

「本当に大丈夫ですって。それよりも聞きたい事があるんですけど

……」

「なんでも聞くがよい。我が夫」

嬉しそうな顔でまたそんな事を言った。

「その……。今、俺の事を……お、夫って言いましたよね。なんでです？」

「そのままの意味だと思うが？我とお主が夫婦だということだよ」

「だからなんで夫婦なんですか！？まだ会ったばかりだっていうのに……」

「我じゃ不満か？」

少し悲しそうな声だったので澁児は慌てて、

「い、いや決して不満というわけではなくてむしろ嬉し…いやそうではなく…」

「ふふふ、冗談だ。いきなり夫婦なんて言われれば誰でも戸惑うだろう」

（からかわれた…）

澁児は少し落ち込んだ。

「事情を説明しようと思うのだが…その前に場所を変えよう」
そういつて美少女は歩きだした。

（とりあえずついていくしかなさそうだ…）

澁児も歩きだそうとしたとき、急に美少女が振り返った。

「そういえばまだ我が夫の名前を聞いてなかったな。名前はなんという？」

「澁児です。巽澁児。え〜とあなたの名前は？」

「我の名は瀧。よろしくな澁児」

瀧の満面の笑みに澁児はみとれてしまった。

瀧に案内されてきたところは澁児も良く知っている場所だった。

水治神社…このあたりで一番大きい神社で代々龍を奉ってきたらしい。ちなみに同級生の穂村加奈子はここの神主の娘だ。

（加奈子と友達なのかな？）

「どうした澁児？」

「なんでもないです」

「ならいいが…。よし、あそこの小屋ではなそう」
そういつて本殿の側の小屋へ向かった。

この小屋は物置として使われているのか色々と物が溢れていた。その中になんとか座るスペースを見つけ、向かい合い座った。

「何から話そうか…。よし、まずはあの鬼について話そう」

鬼…

漣児はその言葉を聞いてあんな化け物に追われてよく無事だったなあ、と改めて恐怖を感じた。

「鬼は妖怪の一種だな。どんなものは…追われていたからよくわかってるだろ？」

漣児は頷きつつ、

「妖怪つてことは他にもあんなのがいっぱいいるんですか？」

「たくさんいるぞ。あ、ちなみに鬼は下級妖怪でまだ弱い部類に入る」

「あんな化け物でも下級なんですか…。というかあんなのが暴れてるっていうのになんで騒ぎにならないんですか？」

「全ての妖怪が悪事を働く訳ではない。それに無差別に人を襲うつて訳でもない。それと襲うときは結界をはるからな」

「そうなんですか…。無差別じゃないつてことは俺はなんで襲われたんですか？」

「うむ。まず悪事を働く妖怪はすべてある組織に属している。そしてある目的のために行動してるのさ」

「目的…」

「人間を滅ぼし妖怪が世界の頂点に立つこと……。それが奴ら”深淵の闇”の目的」

「人間を滅ぼす！？大変じゃないですか!？」

「落ち着け澪児」

「す、すみません…」

「うむ。それで話の続きだが、闇があれば光もある。深淵の闇から人間を守るために戦う者たちもいるんだよ。それが通称”共存派”」
瀧はそういつて微笑む。澪児は取り乱してしまつた自分を少し恥じた。

「もしかして瀧さんはその共存派の？」

「そうだ。昔からずっとこの地を守ってきた」

澪児は疑問を感じた。瀧はどうみても自分と同じぐらいの年にしかみえない。それなのに昔からというのはおかしい。

「昔から、というのはおかしい……と顔に書いてあるぞ」

そういつて瀧は笑う。

「実はな澪児。我は人間ではない。龍なんだよ」

「は？龍つて……あの龍？」

「信じられないか？澪児」

「半信半擬つてところです……。瀧さんはそんな華奢な体でいとも簡単に鬼を倒しましたし……」

「半分も信じてくれれば今は充分さ。……それでお前が狙われた理由だが」

ガラガラ

話している途中に急に扉が開いた。

「やっと見つけた…。帰ってきたなら一言知らせてよ」
そこにたっていたのは穂村加奈子だった。

第三話・日常の裏側（後書き）

なんだか今回は会話ばかりになってしまいました。やっぱり書くのは難しいです…

第四話：特別な力、1（前書き）

まずは皆さんにお詫びしたいと思います。本当にごめんなさい。前話投稿から大分間があいてしまいました。今は大分忙しい時期で、中々考える暇がありませんでした。次からはできるだけ早く書こうと思います。面白いかどうかは分かりませんが、少しでも多くの人に読んで貰えれば幸いです。

第四話：特別な力、1

「おお加奈子か。すまん、こやつに事情を説明していたのだよ」

そういつて瀧は澪児を指さした。澪児と加奈子の目があつた瞬間、加奈子の顔が悲しそうに歪んだ。

「もしかして澪児が同調者…なの？」

瀧はさも意外だという顔をして、

「知り合いだつたのか？世の中狭いな…」

と、一人でうんうんと頷いていた。

「いかにも澪児が我の同調者だよ」

それにまた加奈子は悲しそうな顔をする。澪児にはなぜ加奈子がそんな顔をするのかわからなかった。瀧はその顔には気付かなかつた。

「私、お茶いれてくるね」

そういつて扉を開けてでていつてしまった。

「じゃあ話の続きをするぞ？」

澪児は後で加奈子と話そうと心に決め、瀧の話聞き始めた。

「さつき加奈子も言っていたが、澪児…。お前は同調者だ。だから鬼に狙われた」

「そういえば鬼もそんなこと言っていました。それで同調者ってなんなんですか？」

「うむ。同調者とは…我等龍族と契りを交わす事で、両者の力を飛躍的に高めることができる者のことだ」

それを聞いて澪児は驚いた。ずっと自分は平凡な人間だと思っていたのだ。急に特別な力があると言われても嬉しさより先にただ驚くだけだった。

「何を呆けておる？驚くのはまだまだこれからだぞ」

少し楽しそうに笑いながら瀧は言った。

「具体的にどんな力が得られるか説明するぞ？まずは一つ目、運動能力が格段にあがる。そうだな…、ブ・ップと戦っても開始

3秒でKO勝ちできるくらいには強くなるぞ」

「ブ・ツプ……………」

龍神のくせになんでこんなことを知っているのか気になったが、漣児は華麗にスルーすることにした。

「むう…、今のは笑うところだぞ？」

スルー。

「……………あけば のほうが良かったか？」

華麗にスルー。

「ゴホン！つまり、普通の人間にはまず負けないということだよ…少し傷付いたのか声のトーンが落ちていた。少しやりすぎたかもしれないと思った漣児は次のボケにはツツコミます！と、心の中で謝った。

ガラガラ

「少し休憩したら？」

加奈子がおぼんを持って部屋に入ってきた。お茶の香りが2人の鼻孔をくすぐる。この香りは紅茶だろうか。

「そうするか…。加奈子の煎れる紅茶は最高だからな」

漣児は鬼に追い掛けられてから何も飲んでいなかったことを思い出した。

「そうなんですか？楽しみだな」

i n t e r c e p t (前書き)

また更新が遅れてしまいました…

急いで考えたので今回は短めです。ごめんなさい m (m

i n t e r c e p t

闇

この場所を表すのにふさわしい言葉が他に見つからない。見渡しても光という物が一切見当たらないのだ。常人ならばまず目が見えなくなつたと勘違いしてしまうかもしれない。

「まだ誰も来てないのか？」

不意に声が響いた。姿は見えないが、声からすると若い男だということがわかる。

「儂以外は皆活動中じゃよ。”殺戮の風”」

また声が響く。やはり姿は見えない。しわがれた女性の声だ。老婆だろうか。

「お前だけか？”狂える技巧”」

「”闇の澱”の4人のうち2人も集まつておるのだ。これでも集まつたほうじゃないかえ？」

「まあ…な」

「それで？集めた理由はなんなのじゃ？」

「ああ。”極東の姫”の同調者が現れた」

男が言つた瞬間、場の空気が重いものになつた。

「それはまことかえ？」

「ああ。問者から報告があつた」

「まずいのお…。今でさえ戦況は膠着しとるといふのに…」

老婆は深刻そうに考え始めた。「まだ契約はしてないがな」

「それを早く言わぬか！」

それを聞き考えがつかんだのか嬉しそうに言った。

「ならば儂の”玩具”を送るうかの」

「ああ。俺もそう考えていた。同調者とはいえ契約前はただの人間だからな」

「そうじゃそうじゃ。儂にまかせい。では早速」

そういつて闇から1つの気配が消えた。

「……」玩具”ね。気に入らん」

そういつて男も消えた。

異様な空間だった。真っ先に目につくのはずらりと並んだ硝子で出来た2メートル程の筒だ。その数は十や二十ではきかない。しかし目を引くのはそれだけではなかった。老若男女、様々な人が筒の中に浮いているのだ。どこかホルマリン漬けの標本を彷彿とさせる。

「いつ見ても壯観よのお……」

男に”狂える技巧”と呼ばれていた老婆だ。いつのまに現れたのだろうか。

「やはり儂の最高傑作の出番かの」

そういつて一つの筒の前に立った。中には若い女が入っていた。髪は肩に届くくらいのショートカット。整った顔立ちで美人の部類に入るだろう。

「目覚めよ！桜華」

言葉と同時に、筒の中の女の目が開いた。

「おはよう。桜華」

老婆の声が響く。すると筒に徐々にひびがはいりはじめ、割れた。女が地面に着地する。と、同時に女が老婆に掴みかかった。

「私を目覚めさせたということは…。また私に罪を重ねると言うのか!？」

苦しむそぶりもみせず老婆は言う。

「忘れたわけじゃあるまいな？」

その言葉を聞いて老婆を掴む手から力が抜けた。

「ちようど百人目だものなあ」

愉快そうに老婆は言う。

「今回の標的は日本に居る。同調者が契約を済ませる前に殺れ」
女は悲しそうに顔を歪め、闇の中へと消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4992a/>

龍姫

2010年12月14日21時33分発行